

# —伊野川から忠別川までの地名⑯—

チノミシリチャシコツと

チャシコツナ

前回まで、掲載地図のチカブニ(cikapuni=ci kap-un-i 鳥居ル処)の

大岩から、漢字表記の「近文」が誕生し

て、大地名になつた経緯を見てきた。

今回は、掲載地図のチャシコツナ

(casi-kot-nay 碧・跡・沢)について

述べる。明治三十一年製版『北海道假製

五万分一図』では、チャシコウンナイ(casi-kot-un-nay 碧・跡・ある・沢)

となつてゐる。

昭和三十四年刊行の『旭川市史第一

巻』では、このチャシコツは、「チノミシリチャシコツ」(ci-nomi-sir-casi-kot 我ら・挾む・山・碧・跡)と命名されてゐる。同書によると、このチャシコツは、一重の空壕で仕切られたチャシ

コツで、内部から石器と鉄斧が、また付近から石鏃その他が発見されている。また、このチャシコツから沢に水を汲みに降りる道は、カムイキロル(kamuy-kiror 神・道)として現存しているといふ。

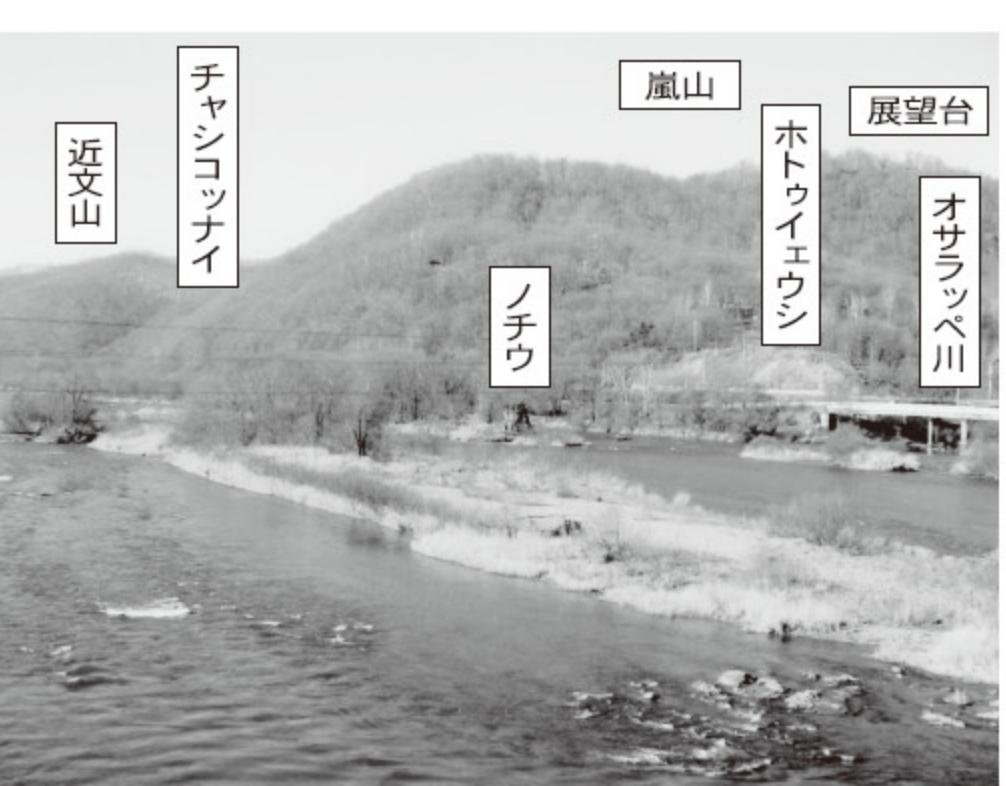
なお、右の記事の筆者・河野広道氏の聞き書きでは、一つの伝承が記録されてゐる。

①門野ハウトムテイ翁

近文アイヌは、ここに「コタンコルカムイ(部落を統治する神)が住んでいたとして、チノミシリ(我等が祈りを捧げる丘)と呼び、大切にしていた。

掲載地図のインカルシ(inkar-us-i 見張り・いつもしている・所)を挟んで、石狩川の下流側の沢が、掲載地図のチャシコツナイであるが、川下にあるので、パンケ・チャシコツナイ(panke-casi-kot-nay 川下の、碧・跡・沢)で、上流側の沢が、パンケ・チャシコツナイ(penke-casi-kot-nay 川上の、碧・跡・沢)であった。その両側の沢の間の先端にあつたのが、インカルシ(inkar-us-i 見張り・いつもしている・所)であつた。石狩川を上下する丸木舟を見張りするひとの出来る場所であつた。

チノミシリチャシコツは、このような伝承を持つチャシで、しかも、このチャシコツから沢に水を汲みに降りる、カムイキロル(kamuy-kiror 神・道)まで現存していたといつて、チャシコツであった。



近文の大橋から石狩川下流  
右岸の展望  
眺望がきくところにあります。  
荒井源次郎翁は、  
掲載地図の「近文山」を、  
「昔、アイヌたちは  
インカルシ(展望台)と呼んでいた」と『続アイヌの叫び』で述べている。

これまで見てきたように、「近文山」を、①チノミシリ( ci-nomi-si-kot 碧跡)と②チャシコツ(casi-kot 碧趾)と一つの地名解を記しているが、これに、荒井源次郎翁のインカルシ(inkar-us-i 見張り・いつもしている・所)を加わると、三つの地名解があつたこととなる。

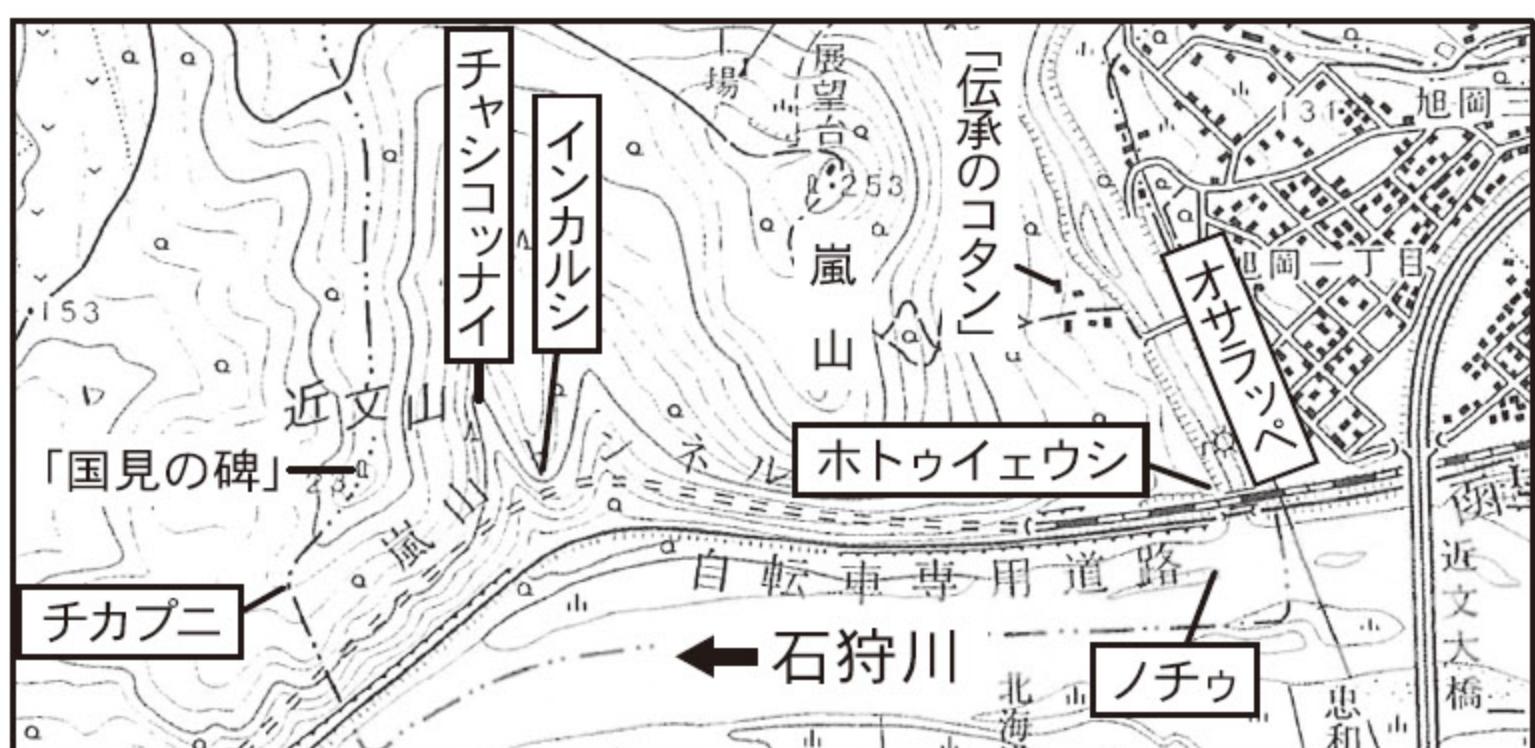
明治十八年八月二十七日に、岩村通俊一行が近文山に登り、いわゆる「国見」をし、翌年、「近文山国見の碑」を建立した際は、いずれも、掲載地図のチャシコツナイの沢から登つたものと推察される。(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します

## 断章 旭川のアイヌ語 地名研究

130

高橋 基



敵と戦争して來た

敵と戦争して來た時、釧路方面から食物を求めて攻めて攻め

ていた。インカルシ(inkar-us-i 見張り・いつもしている・所)は、全道的にある名称で、最も有名なのが、遠軽の地名由来になつた「展望石」(かんばういわ)で、同じインカルシであった。札幌の藻岩山のアイヌ語名が、インカルシ(inkar-us-pe 見

張り・いつもしている・所)で、いずれもいつもしている・所)は、全道的にある名称で、最も有名なのが、遠軽の地名由来になつた「展望石」(かんばういわ)で、同じインカルシ(inkar-us-pe 見